

石見銀山遺跡港湾集落

発掘調査報告書

2005年3月

島根県教育委員会

序

石見銀山遺跡は16世紀のヨーロッパの地図にも記載された日本を代表する鉱山遺跡であり、ここで培われた鉱山技術は日本各地の鉱山に波及して、大量の銀の産出を可能にしました。中国や朝鮮半島に出回った大量の日本銀は東アジアの経済に大きな影響を与え、ヨーロッパと東アジアとの交易にも大きく貢献しました。

その石見銀山遺跡は、平成12年に開催された国・文化財保護審議会世界遺産特別委員会において、ユネスコに提出される世界遺産推薦候補物件のひとつに選定され、平成13年4月に世界遺産の暫定リストに登載されました。

これに伴い、島根県教育委員会では地元大山市・温泉津町・仁摩町とともに、仙ノ山を中心とする銀山柵内をはじめ、16世紀に銀鉱石や銀を積み出した港湾、港湾と鉱山を結ぶ街道などについて、順次、国史跡への追加指定申請に必要な手続きを進めてまいりました。

本書は、平成16年度に、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した港湾集落発掘調査の成果をまとめたものです。発掘調査によって港湾集落の地割りの変遷の一部が解明されるなど、貴重な成果を得ることができました。本書が今後の調査研究や将来の保存管理の資料として活用されれば幸いに存じます。

この調査に際しまして、ご協力いただきました地元住民の皆様をはじめ、関係各位に衷心よりお礼申し上げます。

平成17年3月

島根県教育委員会教育長

広沢 卓嗣

例　　言

1. 本書は平成16年度に島根県教育委員会が国庫補助事業として実施した、石見銀山遺跡港湾集落発掘調査の調査報告書である。
2. 発掘調査の対象とした港湾集落は、石見銀山遺跡沖泊および駒ヶ浦として国史跡に指定されている二つの港湾にそれぞれ付随する集落で、発掘調査地点は以下のとおりである。なお、年度途中で沖泊に隣接する口村でも発掘調査を実施することになり、その調査地点はその下に記したとおりである。
 - (1)島根県簸摩郡温泉津町温泉津ロ257番地ほか
 - (2)島根県簸摩郡仁摩町人馬路町207番地ほか
 - (3)島根県簸摩郡温泉津町温泉津イ291-4番地ほか
3. 調査組織は次のとおりである。
〔事務局〕
島根県教育庁文化財課 山根正巳（課長）、祖田浩志（文化財グループリーダー）、和田謙一（世界遺産登録推進室長）、太田俊介（同主任主事）
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター ト部吉博（副所長）、永島静司（総務グループ課長）、広江耕史（同主幹）、宮本正保（同文化財保護主事）
〔調査員〕
丹羽野裕（文化財主幹）、原田敏照（同文化財保護主事）、足立克己（埋蔵文化財調査センター総務グループ（兼）文化財主幹）、池瀬俊一（調査第一グループ文化財保護主事）
〔調査指導〕
柳井田佳男（文化官）、田中 琢（石見銀山遺跡調査整備委員会）、田中義昭（同）
〔協力〕
温泉津町教育委員会、仁摩町教育委員会、大田市総務部石見銀山課
4. 調査参加者
重富利博、重富恒義、田口信行、岩倉長光、大築 要、松村隆雄、松村美彦、渡辺恵子
5. 発掘調査にあたっては、土地の地権者である杉山利子（代理人大門忠雄）、酢谷千枝（代理人山内 喜）、金松正武、岩崎信也、松浦アキヨ（代理人上肥義臣）の各氏から協力を得た。記して衷心より謝意を表したい。
6. 本書に掲載した遺跡位置図は国土地理院が発行した地図を、トレンチの配置図は島根県教育委員会が作成した石見銀山遺跡銀山街道の測量図を基に作成したものである。また、遺構の挿図中に示した矢印は磁北を示している。
7. 本書に掲載した遺物の実測は井上伸子、浅野美貴、岩谷雅美が行い、図面は足立が作成した。また、図面の浄書は渡部恵子が行った。
8. 本書に掲載した写真は足立が撮影し、写真図版10-2・3を丹羽野裕、池瀬俊一が撮影した。写真図版中の遺物写真に付した番号は攝影番号を示す。
9. 本書に掲載した出土遺物、写真・実測図等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。
10. 本書の執筆、編集は足立が行った。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境.....	1
(1) 地理的環境.....	1
(2) 歴史的環境.....	2
第2章 調査の目的と経過.....	4
第3章 調査の概要.....	6
(1) 沖泊地区.....	6
(2) 粕ヶ浦地区.....	11
(3) 日村地区.....	17
第4章 まとめ.....	19

挿 図 目 次

第1図 石見銀山遺跡（銀山橋内・銀山街道）の位置と周辺の中近世遺跡.....	1
第2図 石見銀山遺跡仙ノ山周辺調査地点位置図.....	5
第3図 沖泊地区トレンチ配置図.....	6
第4図 沖泊地区第1トレンチ遺構実測図.....	8
第5図 沖泊地区第3トレンチ7層上面遺構ならびに土層実測図.....	9
第6図 沖泊地区第2トレンチ遺構ならびに上層実測図.....	9
第7図 沖泊地区第3トレンチ出土遺物実測図.....	10
第8図 粕ヶ浦地区トレンチ配置図.....	11
第9図 粕ヶ浦地区第1トレンチ遺構ならびに上層実測図.....	12
第10図 粕ヶ浦地区第2トレンチ集石遺構ならびに土層実測図.....	13
第11図 粕ヶ浦地区第3トレンチ遺構実測図.....	14
第12図 粕ヶ浦地区出土遺物実測図（1）.....	14
第13図 粕ヶ浦地区出土遺物実測図（2）.....	15
第14図 日村地区トレンチ配置図.....	16
第15図 日村地区第2トレンチ上層実測図.....	17
第16図 日村地区第1トレンチ土層実測図.....	18

図版目次

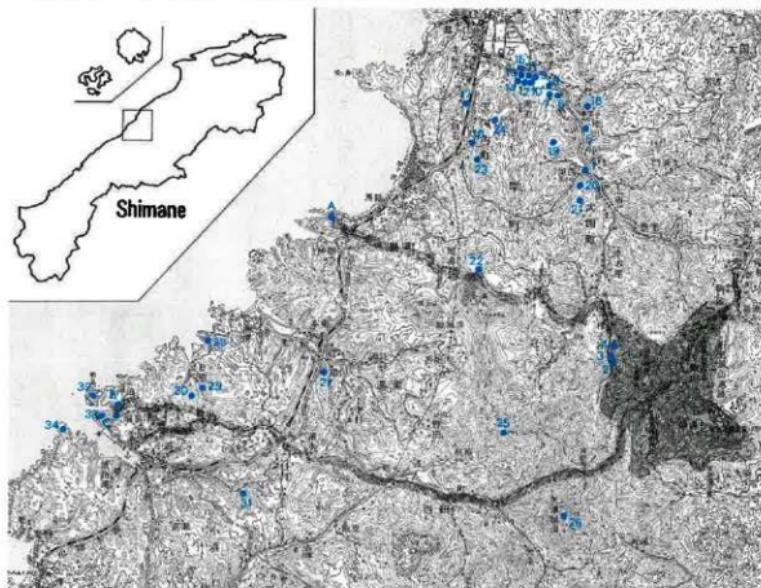
- 図版1-1 沖泊地区港湾
図版1-2 沖泊地区集落近景
図版1-3 沖泊地区第1トレンチ設定箇所
図版2-1 沖泊地区第1トレンチ西半
図版2-2 沖泊地区第1トレンチ礎石検出状況
図版2-3 沖泊地区第1トレンチ東壁
図版3-1 沖泊地区第1トレンチ南壁
図版3-2 沖泊地区第3トレンチ西壁
図版3-3 沖泊地区第3トレンチ7層上面の溝状落ち込み
図版4-1 沖泊地区第2トレンチ設定箇所
図版4-2 沖泊地区第2トレンチ全景
図版4-3 沖泊地区第2トレンチ西壁
図版5-1 瞬ヶ浦地区第1トレンチ
図版5-2 瞬ヶ浦地区第1トレンチ全景
図版5-3 瞬ヶ浦地区第1トレンチ玄関石敷
図版6-1 瞬ヶ浦地区第1トレンチ玄関壁
図版6-2 瞬ヶ浦地区第1トレンチ土間北側礎石
図版6-3 瞬ヶ浦地区第1トレンチかまど跡
図版7-1 瞬ヶ浦地区第1トレンチサブトレンチ土層
図版7-2 瞬ヶ浦地区第2トレンチ設定箇所
図版7-3 瞬ヶ浦地区第2トレンチ集石遺構
図版8-1 瞬ヶ浦地区第2トレンチ東壁（南半）
図版8-2 瞬ヶ浦地区第2トレンチ東壁（北半）
図版8-3 瞬ヶ浦地区第2トレンチ集石遺構南端部礎石
図版9-1 瞬ヶ浦地区第3トレンチ設定箇所
図版9-2 瞬ヶ浦地区第3トレンチ全景（東から）
図版9-3 瞬ヶ浦地区第3トレンチ近景
図版10-1 日村地区第2トレンチ設定箇所遠景
図版10-2 日村地区第2トレンチ西壁
図版10-3 日村地区第1トレンチ南壁
図版11-1 沖泊地区第3トレンチ出土遺物（1）
図版11-2 沖泊地区第3トレンチ出土遺物（2）
図版11-3 瞬ヶ浦地区出土遺物（1）
図版12-1 瞬ヶ浦地区出土遺物（2）
図版12-2 瞬ヶ浦地区出土遺物（3）

第1章 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

石見銀山遺跡は、多数の採掘跡が残る鉱山本体にとどまらず、戦国人名の銀山争奪戦に深く関わった周辺の山城跡、銀鉱石や銀を積み出した港湾、さらに鉱山と港湾を結ぶ街道など、石見銀山の銀の生産から支配、交通、生活、信仰に至るまで、銀の生産に関わる社会システム全般にわたって残存している遺跡群の総称である。その範囲は、鉱山本体である大田市大森町の仙ノ山を中心として、大田市・邇摩郡温泉津町・同仁摩町の一市二町にまたがっており、総面積は約440haにも及ぶ。この地域は東西に細長い島根県のはば中程に位置し、島根県西部の石見地方を石東・石央・石西の三つにわけた場合の石東に相当する。もともと石見地方は中国山地から続いた山塊が日本海沿岸まで迫り、沖積平野の少ない地域であるが、銀山柵内を流れる銀山川の下流には石西の益田平野につぐ広さの沖積平野が広がっている。しかし、石見銀山が開発された16世紀にはこの大田市街へと続くルートよりも、日本海までの最短ルートが交通ルートとして選択され、そのために関連遺跡は仁摩・温泉津の二町側に広がっている。日本海から仙ノ山までの距離は直線距離にして約6kmである。

標高約538mの仙ノ山周辺の山塊は、溶岩円頂丘と呼ばれるこんもりした火山体で構成されてお



第1図 石見銀山遺跡（銀山柵内・銀山街道）の位置と周辺の中近世遺跡

- A 藤ヶ浦 B 沖泊 C 日村 1 古市遺跡 2 三老坑跡 3 永久坑跡 4 永久稼所精錬所跡 5 駒岩遺跡 6 古屋敷遺跡 7 末ヶ坪遺跡 8 孫四田遺跡 9 大月遺跡 10 コラスミ遺跡 11 京円原遺跡 12 ヒヨトリケ市遺跡 13 千後田遺跡 14 入石遺跡 15 清石遺跡 16 白石上屋敷遺跡 17 横屋前遺跡 18 石見城跡 19 大国城跡 20 虹ヶ谷城跡 21 茶臼山遺跡 22 乙見城跡 23 半畠跡 24 天恒内城跡 25 矢張城跡 26 矢瀬城跡 27 温泉城跡 28 舛の糸跡 29 新床城跡 30 金剛谷城跡 31 姫谷城跡 32 櫛島城跡 33 鴨丸城跡 34 莺島城跡

り、狭隘な谷間に銀山川や柏子谷川などの小河川が流れ、それに沿って大森銀山地区の町並みなどが形成されている。

周辺の地質学的な特徴は、日本海沿岸に第三紀中新世の久利層があり、内陸側では第二紀鮮新世から第四紀更新世の都野津層と大江高山火山岩類がこれを覆っている。久利層は約1500年前の火山碎屑岩よりもなっており、温泉津町清水から福光にかけて分布している緑色を帯びた凝灰岩は特に福光石と呼ばれ、石見銀山構内やその周辺の石造物の材料として重宝がされていた。都野津層は200万～100万年前に陸上から浅海に形成された堆積層で、礫層と粘土層が互層をなす。このうち、淡水で堆積した粘土層は陶土に適しており、石州瓦や石見焼の原料として利用されている。大江高山火山岩類はおよそ100万年前の大江高山（大田市大代町・祖式町）の火山活動により形成された地層で、主にデイサイト（石英安山岩）質の火山岩からなる。石見銀山の鉱床は、この大江高山火山群の活動に伴う熱水によって形成されたものである。人森町の柄柳谷や大谷などの谷部からさらに下位では、久利層や都野津層の岩盤の亀裂を伝わって硫化鉱物を多く含んだ貫入型デイサイトを晶出し、鉛脈型鉱床（永久鉱床）を形成する。また、仙ノ山頂上付近では热水が地表近くまで達して岩石の空隙を充填し、自然銀を多く含んだ鉛染型鉱床（福右鉱床）を生成している。

港湾が整備された温泉津町沖泊並びに仁摩町柄ヶ浦周辺の海岸は、一部に馬路町琴ヶ浜のような長い海浜を形成しているところもあるが、基本的に海浜は小規模で、多くは小規模な渦が連続する岩石海岸である。海岸付近の丘陵は標高50m程度で、丘陵の先端は急な崖面が海に向て連続している。丘陵の頂部の標高は奥地に向かって徐々に高くなる。海岸線に沿ってほぼ同じ高さで続くこれらの丘陵は、かつての海底の堆積面の高さを示しているが、現在は丘陵のほとんどが小河川の浸食作用を受けて大きく形を変えている。

連続する小規模な湾の湾頭には岩盤に波食台が形成され、港湾として利用された沖泊、柄ヶ浦ではこの波食台に舟のとも網を係留する「鼻ぐり岩」が削り出されている。

参考文献

小畠 浩『中国地方の地形』古今書院 1991年

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会『石見銀山遺跡総合調査報告書 平成5年度～平成10年度』第1冊【遺跡の概要】第1章位灘と環境 1999年

中村唯史『地形と地質』『石見銀山街道 柄ヶ浦道・温泉津沖泊遺調査報告書』島根県教育委員会 2004年

中村唯史『沖泊・柄ヶ浦とその周辺の地形・地質』『石見銀山街道 柄ヶ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会 2005年

（2）歴史的環境

石東地域では、大田市波根町から仁摩町仁万にかけての海岸部の沖積地周辺に遺跡が集中しており、石見銀山遺跡が広がる大田市大森町から仁摩町南部、温泉津町北部にかけての一帯では、遺跡数は少ない。この地域の原始・古代の遺跡は、仁摩町潮川河口の冲積地を取り巻く微高地に集中して認められる。特に坂灘遺跡は当地域最大の複合遺跡で、昭和22年に仁万漁港の改修工事に伴って実施された発掘調査では、多量の弥生土器のほか古墳時代の箱式石棺や多数の歴史時代人骨等が出土している。縄文・弥生時代の遺跡では、馬路琴ヶ浜の後背地にあたる鳥居原遺跡やクネガソネ遺跡、潮川下流域の普興寺橋遺跡や川向遺跡などが古くから知られている。また、最近調査された人

国町古墳遺跡では弥生前期の土坑、天河内町樺ノ木遺跡では弥生後期の竪穴住居跡等が発見されている。温泉津町湯里の川向遺跡からは湾に面した緩傾斜地から大型船刃石斧6本が出土し、埋納遺跡と考えられる。古墳時代では顯著な前期古墳は認められないものの、後期の遺跡として、全長約10mの横穴式石室に家形石棺を備えた県指定史跡明神古墳や双竜頭頭大刀が出土した馬路の鳥居原古墳のほか、樺ノ木谷横穴墓群をはじめとする横穴墓群が知られている。

律令時代の石見国は承和10(843)年まで郡、それ以後6郡からなっており、石見銀山遺跡周辺はまさに邇摩郡に相当する。現仁摩町仁万周辺には郡家があったと推定されるが、8~10世紀代の遺跡についてはまだあまり確認されていない。11世紀になると潮川沿いに集落が形成されるようになり、特に潮川左岸の五丁田台地区には、京原遺跡(第1図11)、下後田遺跡(13)、入石遺跡(14)など、掘立柱建物を主体とする集落が出現する。

中世には国衙在官人層の主導による国衙領の再編が進み、大規模な荘園が成立する。邇摩郡内には大家荘、大國荘、静間御領の3カ所の莊園と、仁満郷・天河内・宅野・久利郷・五十石の5カ所の国衙領があり、石見銀山は大家荘と久利郷に含まれて、「佐摩(村)」と呼ばれた。仁摩町の上述の五丁田台地区には新たに清石遺跡(15)、ヒヨトリヶ市遺跡(12)、コラスミ遺跡(10)、末ヶ坪遺跡(7)、古屋敷遺跡(6)など13~14世紀代の聚落が集中的に出現し、これらからは多数の掘立柱建物跡や輸入陶磁器類が発見されている。また、中世には日本海海運が発達し、多くの津・湊が成立したとされており、この時期、仁満津・温泉津・福光湊などが生まれたと考えられる。

南北朝時代に右見守護職となった大内氏は、応永の乱の敗戦によりそれ以降守護職を没収されて京極・山名両氏に譲ったが、邇摩郡だけを支配する分郡知行を成立させた。16世紀に至ると石見銀山の本格的な開発に伴って、大内氏と小笠原氏、尼子氏の間で壮絶な銀山争奪戦が繰り広げられるが、大内氏滅亡後は毛利氏が霸権を得て、尼子氏と攻防戦を行っている。仙ノ山に隣接する山吹城を中心として、石見銀山の周辺には史跡右見城跡(18)、史跡矢苦城跡(25)、史跡矢滝城跡(26)など当時築かれた山城が幾つも残っている。銀山を掌握した毛利氏は、温泉津を直轄地として港湾を整備し、湾の入り口に櫛島城(32)、鶴丸城(33)を築いてこれの防御とした。

関ヶ原の戦いの直後の慶長5年には、徳川家康が石見銀山の領有を図って大久保長安を送り込んで徳川家の実質支配が始まったのち、元和年間には安濃郡・邇摩郡全域を含めた天領(石見銀山附御料)が成立した。石見銀山は慶長期から寛永期に最盛期を迎える。温泉津は銀の積出と銀山へ搬入する物資の荷揚げで活況を呈したとされる。元禄年間以降には石見銀山領の中から銀山で必要とする物資の供給を義務づけた「御用村」が定められたが、大量の生活物資を消費する銀山への物資供給はこれだけでは足りず、温泉津と銀山街道を使った物資の輸送がその後も盛んに行われたとされる。

参考文献)

平凡社『島根県の地名』日本歴史地名体系33 1995年

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会『右見銀山遺跡総合調査報告書 平成5年度~平成10年度』第1冊〔遺跡の概要〕 1999年

島根県大田土木建築事務所・島根県仁摩町教育委員会『清石遺跡外発掘調査報告書』 1998年

島根県川本農林振興センター・島根県仁摩町教育委員会『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』 1999年

第2章 調査の目的と経過

平成8年から始まった島根県教育委員会と大田市、温泉津町、仁摩町の各教育委員会が共同で行う石見銀山遺跡総合調査は、発掘調査を中心として科学調査、城跡調査、石造物調査、間歩調査、歴史文献調査、民俗調査、港湾調査、街道調査と多岐にわたり、多面的にその全容の解明が図られている。平成11年3月にはそれまでの調査成果をまとめた6分冊にわたる調査報告書が刊行され、石見銀山の鉱山から支配と流通、生活や信仰、そして町並みまで、遺跡の多様な全体像が明らかにされた。そして、世界遺産登録の前提として、国の最高法規による遺跡の保護対策が必要なことから、多数の銀採掘跡が残る仙ノ山を中心とする銀山柵内から、16世紀に銀鉱石や銀の積出港として整備された港湾とそれを結ぶ街道まで、まだ史跡指定を受けていない部分について、石見銀山遺跡としての追加指定に向けた取組が進められた。これと併行するように、平成12年には国の文化財保護審議会世界遺産特別委員会で石見銀山遺跡を世界遺産に推薦することが決定され、平成13年4月にユネスコの世界遺産暫定リストに登載された。平成11年に追加指定申請を行った案件については、平成14年4月に、指定同意が得られなかった一部を除く銀山柵内と銀山を取り巻く山域跡群、そして海面を含めた二つの港湾が追加指定された。

その後さらに平成15～16年度の2カ年にわたりて街道調査や港湾集落調査を実施し、平成16年7月の申請に基づいて、平成17年3月には銀山街道と重伝建大森銀山地区の一部（宮ノ前）が追加指定された。また、温泉津の町並みが平成16年7月に港と温泉の町として重伝建地区の選定を受け、残る銀山柵内の未同意部分と重伝建大森銀山地区内の羅漢寺五百羅漢、それに、沖泊・柄ヶ浦の両港湾集落部分の史跡の追加指定申請も平成17年1月に行っている。

史跡石見銀山遺跡沖泊・柄ヶ浦の両港湾には、浜に続く谷奥に集落が形成されている。この両集落は、港が整備されるとともに成立し、その後も継続して維持されてきた集落である。これまでの文献や地籍調査の結果から、近世以来引き継がれてきた地割りの上に存在する伝統的集落であることがわかっており、その歴史的連續性と自然的因素である地勢とが相俟って、この地区固有の文化的景観を形成している。しかし、残念ながら、個々の地割り内にどのような建物が建ち、またそれらの建物が具体的にどのような歴史を辿ってきたかまでは明らかにできていない。平成8年以来継続して実施している石見銀山遺跡発掘調査（第2回）は、大田市が事業主体となって銀山柵内や重伝建大森銀山地区内を重点的に実施しており、別地点の調査は行っていなかった。

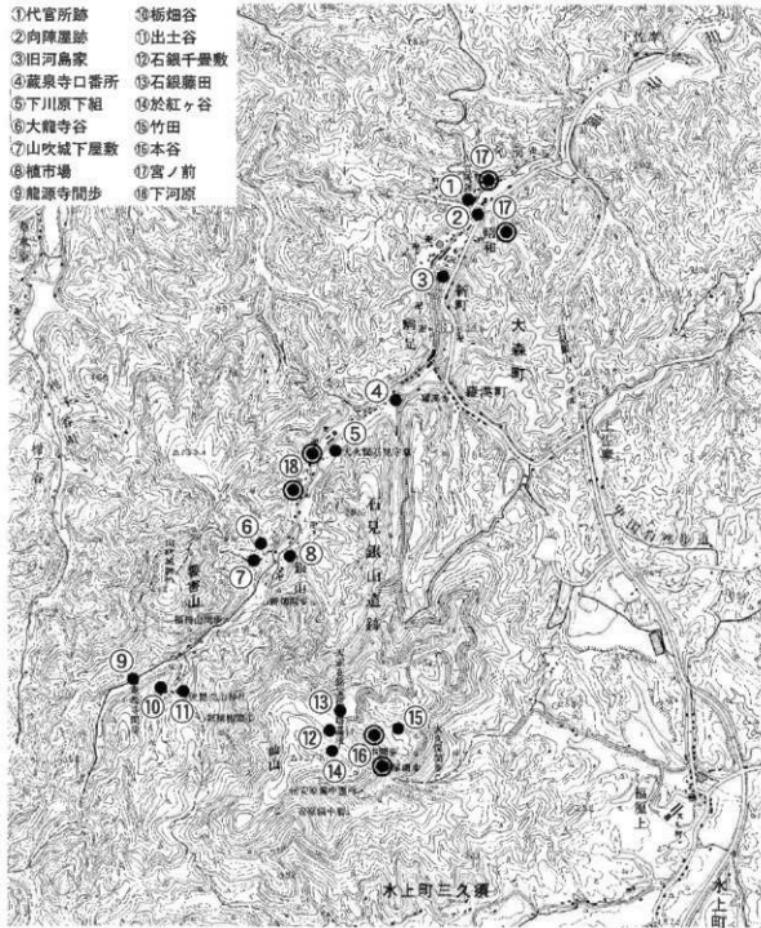
よって今回、島根県教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施し、地下構造の配置や残存状況を確認することにし、併せてその調査成果を史跡指定後の保存・整備事業に供するための基礎資料としたものである。

発掘調査は平成16年4～5月の2ヶ月間で実施した。調査地点は、沖泊・柄ヶ浦両集落の浜に近い部分で空き地となっている区画2～3カ所に、それぞれ1～2カ所のトレーンチを設定することにした。平成16年4月14日、沖泊地区の調査から開始したが、3カ所のトレーンチのうち2カ所で明治時代と思われる家の基礎や玄関十間を検出し、遺構保護の観点から発掘作業は短期間で終ることにした。同年5月7日には柄ヶ浦地区の調査に入ったが、こちらでもすぐに同様の遺構が検出され、第2トレーンチからは集石遺構が検出された。両地区とも5月14日に開催した石見銀山遺跡調

査整備委員会の現地視察ならびに調査指導を受けた後、埋め戻しを行って現状復旧した。

さて、この港湾集落調査事業とは別に、温泉沖町が沖泊のすぐ南隣の口村という谷に下水道の最終処理場を建設する計画があり、平成16年度にいたって予定地内の埋蔵文化財について県土木部下水道課から県教委文化財課へ取扱協議があった。この口村には江戸時代の記録で沖泊と同様に集落があったことがわかつており、史跡の隣接地でもあることから、建設予定地内の遺構の有無を確認する必要が生じた。そこで文化庁とも協議の上、この国庫補助事業の一環として平成17年1月に発掘調査を実施した。

- ①代官所跡
- ②向陣屋跡
- ③旧河島家
- ④藏泉寺口番所
- ⑤下川原下組
- ⑥大龜寺谷
- ⑦山吹城下屋敷
- ⑧植市場
- ⑨龍源寺間歩
- ⑩柵畠谷
- ⑪出土谷
- ⑫石銀千畳敷
- ⑬石銀藤田
- ⑭於紅ヶ谷
- ⑮竹田
- ⑯佐本谷
- ⑰宮ノ前
- ⑲下河原



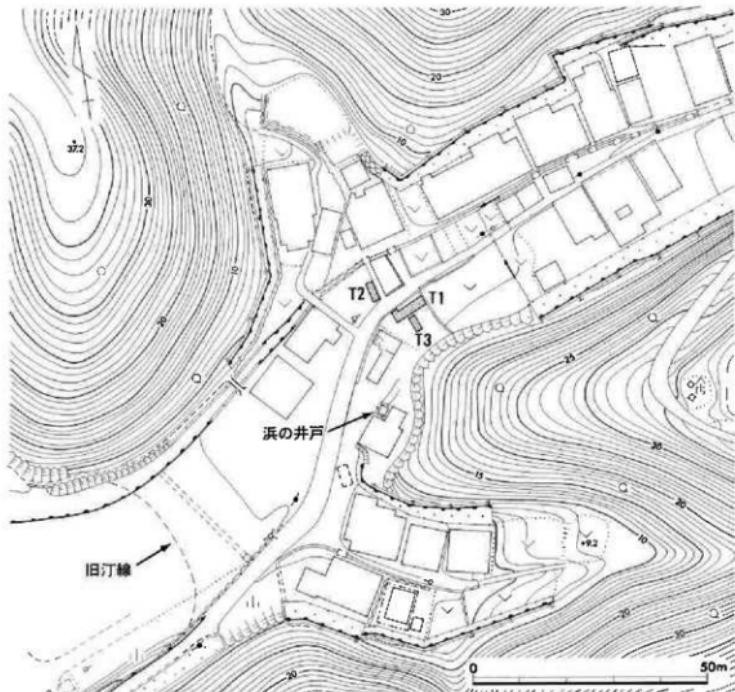
第2図 石見銀山遺跡仙ノ山周辺調査地点位置図
(S = 1/25,000、島根県教委・大田市教委『石見銀山遺跡発掘調査概報14』2004年から転載)

第3章 調査の概要

(1) 沖泊地区

沖泊地区では、島根県邑茂郡温泉津町温泉津口257番地および218番地の2カ所の空き地に、計3本の調査区を設定した(第3図)。現在はこれよりも浜側に正念寺と集会所が建っているが、かつては南側の別の支谷を除くと、この集落でも一番浜に近い地割りと考えられ、257番地のすぐ西には船舶用の水を汲んだ浜の井戸がある。218番地は昭和40年代前半まで家屋が建っており、257番地は戦前に家屋が解体された後は豚の飼育場として利用されていたことがわかっている。

第1トレンチ 第1トレンチは道路に面した建物跡の間口の大きさを確認するため、257番地内に道路に平行に、幅2m、長さ7mと細長く設定し、途中から東側を隣の地割りとの境界まで、また、西端を道路側へそれぞれ拡張した。発掘の結果、地表下20~30cmで暗灰色土の整地層に達し、上面に礎石や柱穴、溝状造構などの遺構が検出された(第4図)。トレンチ西端で検査した礎石は一辺45cmの平面正方形の切石で、材質はわからないが、本体を造成土の中に埋め込んで上面がほとんど造成面と同じ高さになるように据えられている。これから西側には道路と併行に固い灰色粘



第3図 沖泊地区トレンチ配置図

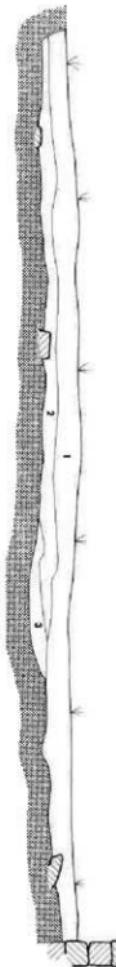
質土の高まりが伸び、東側には逆に幅30cm、深さ約5cmの溝状遺構が続いている。この溝状遺構の性格ははっきりしないが、遺構部分には方形礎石から心々で180cm間隔で柱穴が2個確認され、礎石とその隣の柱穴に対応するように、南側に約130cmの間隔をおいて、東石状の小石2個も検出された。なお、これらの東側は造成上上面が搅乱を受けており、これらに続く東石状のものは発見されなかったが、2.5間先のトレンチ東端部分ではやはり礎石が1個検出された。以上により、方形礎石の西側に玄関があったことが推定され、その東側に2.5間分の桁行きのある建物が建っていたと推定された。また、現在セメント舗装道路との境をなしている石列は基本的にかっての地割りの原位置を留めていると判断された。東側の地割りとの関係では、隣の敷地の石垣となる4段に重ねた布石の下に造成土が続いていることがわかり、この部分が隣接地と併せ、造成されたことが判明した。

第1トレンチは後述する第2トレンチほどに礎石等の残りはよくなかったが、造成面に遺構が良好に残存していたため、それ以上の掘削は取りやめた。これに代えてさらに下層の状況を確認するため、幅1.5m、長さ3.3mの第3トレンチをこれに直交するように設定した。

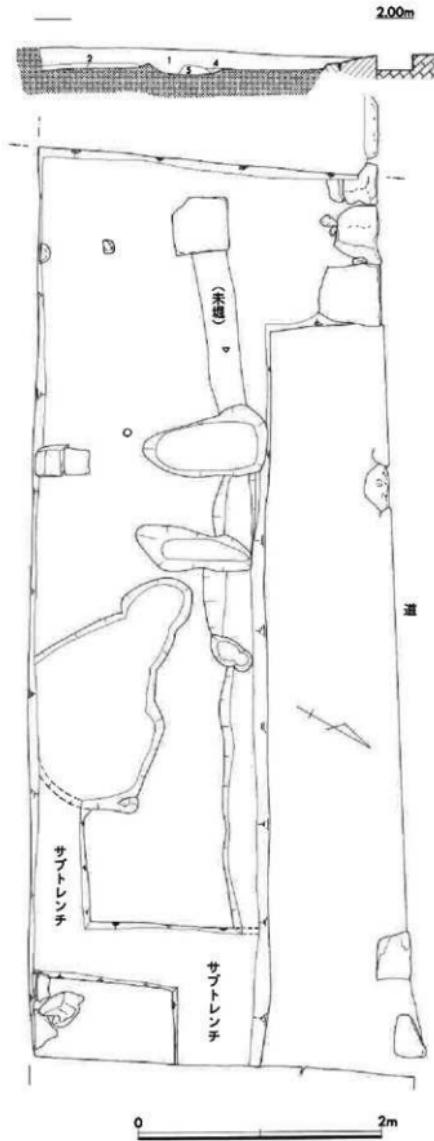
第3トレンチ 地表下約90cmまで掘り下げて土層を観察した(第5図)ところ、深さ40~50cmのところで、旧表土と思われる黒灰色の粘質土を検出した。土層中からは黒色瓦片しか出土しなかつたため、年代は判然としないが、表面は一尺盛り上がるような高まりを見せたのち、北に向かって徐々に低くなり、約20cmの段差でもって水路状の落ち込みへと続いている。段差部分には一部に貼石が数個認められ、落ち込み内にも上層の地山疊と異なる人頭大の石があったことから、本来はこの段差部分にずっと石が貼られていた可能性がある。不自然な高まりを示しているが、畑として利用されていたと推定される。2層整地上とこの7層との間には、近辺の地山疊を多量に含む造成層があり、南側の川裾を大きく削って整地し、現在の地表面の地割りを形成したことが推定された。トレンチ西半を掘り下げてさらに下層の堆積状況を確認したところ、7層の下には、若干の炭化物を含んだ9層茶灰色砂とその下に10層暗灰色砂が堆積し、9層上面ではトレンチ南側で谷方向に続くと考えられる溝状の窪みが認められた。この窪みには青灰色粘質砂が堆積していることから、水の流路であった可能性が高い。トレンチ最下層の10層は、径が10cm程度までの円礫を多く含み、粒子が小さく均一な砂の層で、汀線に近い小河川の河床を思い起させるものである。8層以下が遺物包含層になり、9・10層から陶磁器類や鉄釘類が出土した。

第2トレンチ 第2トレンチは、温泉津川218番地に谷方向に直角に設定した。表土の畑耕作土の下には客土と家屋解体時の整地土があり、この下から昭和40年代に解体された家屋の玄関部分の遺構が確認された(第6図)。家屋は現在集落の中央を走る道に接して建てられており、道路に接して基礎の布石が並んでいる。玄関戸の布石は道路端から72cm控えた位置にあって、そこまでの地面には一枚石が敷かれている。玄関の幅についてはわからないが、玄関周辺の基礎は幅21cmの布石で組まれており、石の表面には羽状の繋の調整痕が明瞭に残る。玄関内側の踏み込みは厚さ4~5mmの叩き土間となっているが、トレンチ東半分では普通の土が露出する。叩き土間と土との境に20cm角の東石とその東側に25cm×30cmの東石があり、大きなほうの東石から北に向かって叩きの縁に平行に、幅5~6cmの平たい石が一列に立て並べてある。現存するのは3個の板石で、その大部分は地中に埋め込まれている。中央の石は上面が地面とほぼ同じ高さに低くなっている。両側の石は地面から6~10cm突出している。3個目から先は抜き取られた模様で、叩き上間側の

4. 明灰色土
5. 灰色粘質土



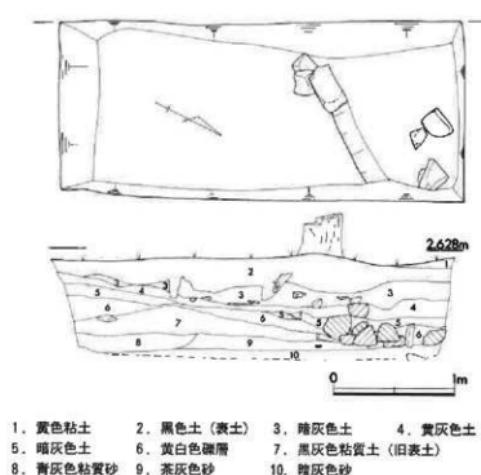
1. 黒色土 2. 暗灰色土 3. 黑灰色土



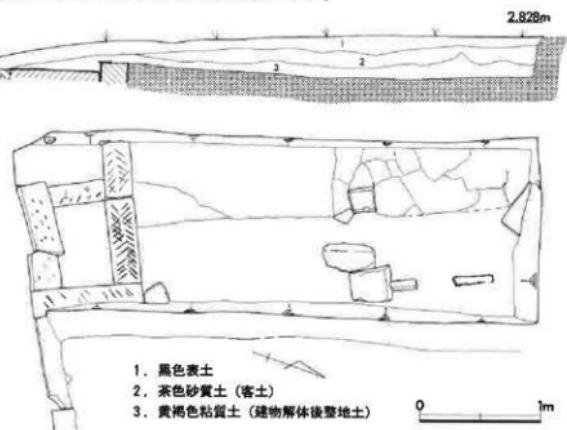
第4図 沖泊地区第1トレンチ造構実測図

浚りのない造成土と東側の家屋解体後に埋め立てられた整地土の間に明瞭な上質の違いが認められた。築落内の聞き取り調査によれば、この辺りでは玄関の脇に芋の貯蔵穴を設けることが多いということがあるので、この聞き取り調査と造構の検査状況から判断すると、この叩きと大きな束石との間がトレンチ東側にあった部屋へ続く上がり端に相当し、その部屋の床下、一列の立石の東側部分に芋貯蔵穴があったものと推定された。叩き土間は、北すなわち家屋の奥に向かって傾斜しているが、これは家屋の建設後に奥側の地盤が沈んだためと推定される。この家屋の解体された時期は概ね確認できたが、建築年代を決定する手がかりは得られなかった。

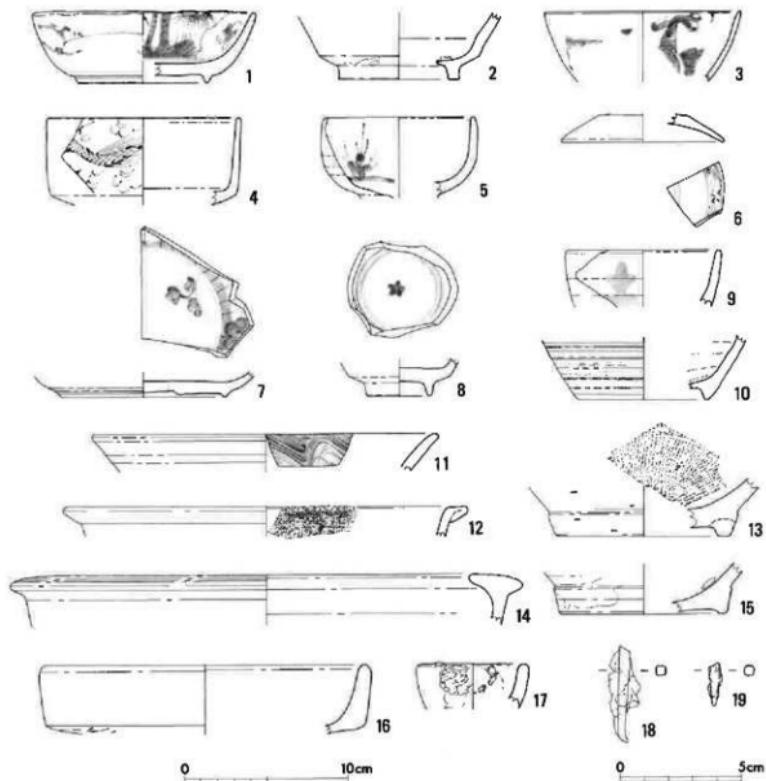
第2トレンチ全面から昭和40年代に解体された家屋の基礎などが良好に確認されたことから、このトレンチでのさらなる掘り下げは断念したが、この調査結果から築落内のほかの空き地にも解体された家屋の基礎が良好に遺存していることが推定された。



第5図 沖泊地区第3トレンチ7層上面造構ならびに土層実測図



第6図 沖泊地区第2トレンチ造構ならびに土層実測図



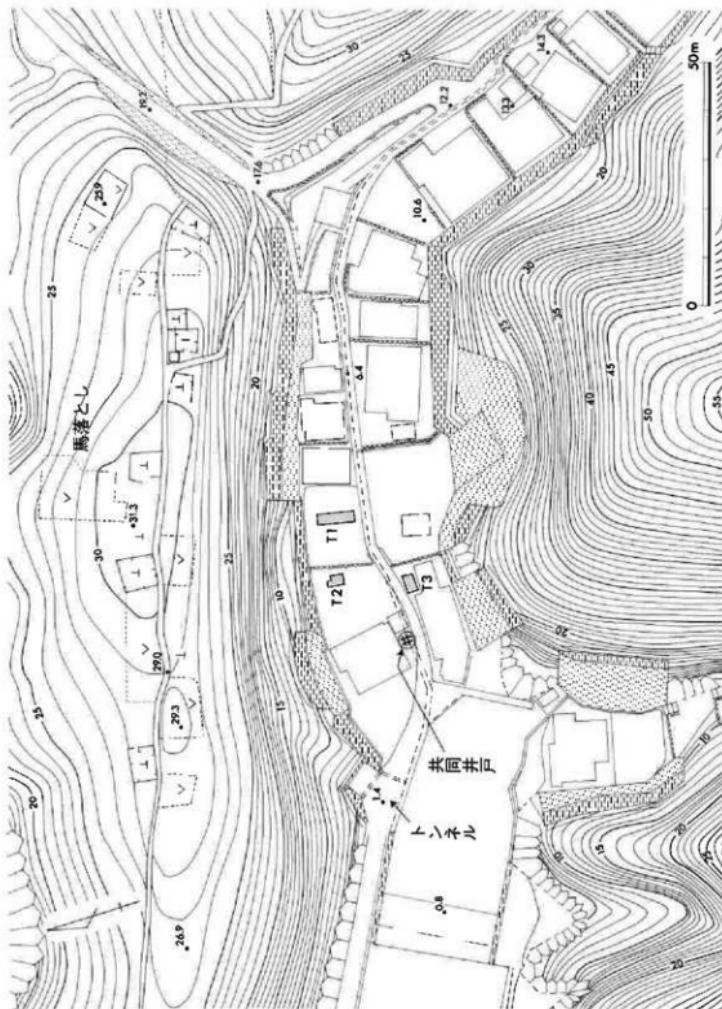
第7図 沖泊地区第3トレンチ出土遺物実測図

出土遺物は8～10層を中心いて陶磁器類や瓦片、鉄釘類が出土した。第7図1は5層出土の肥前系の染付磁器皿で、波状口縁に断面三角形に近い高台がつく。2は9層出土の右見焼と思われる碗の底部片である。1は19世紀前半代のもの、2は江戸末に近いものと思われる。4から19は10層出土品である。4～9は肥前系染付類で、6は内面に染付のある外青磁碗蓋、7は蛇の目凹形高台の皿、9は陶胎染付碗である。10・11は肥前系陶器の壺と皿で、ともに刷毛目文様がはいる。12・13は肥前系擂鉢、14は壺口縁部である。16は土製の焰格である。これらはいずれも18世紀から19世紀前半代に属するものである。15は石見焼と思われる鉢の底部で、内面に目跡が残る。19世紀前半から江戸末のものと思われる。なお、手押ねの小形るっぽ(17)が1点出土している。復元口径は6.8cmで、口縁部が緑色のガラス質になっており、内表面は黒色に変色している。

以上のように、9・10層出土品には18世紀から19世紀前半代のものを中心に江戸末に近いものも含まれ、明治以降の所産を含まないことから、3～6層の造成は概ね19世紀前半～江戸末期に近い時期に行われたと考えられる。

(2) 鞠ヶ浦地区

仁摩町鞠ヶ浦地区は、温泉津町沖泊地区に比べて谷幅が狭く、しかも平坦地の傾斜角が大きいため集落が密集した印象を受ける。現在の友漁港はコンクリート岸壁になっているが、それ以前は現在のトンネル付近に汀線があったとされている。集落入口の民家の前に集落の共同井戸がある。集落内の屋敷地で空き地となっているのは浜に近い部分と谷の奥部である。調査トレンチは浜に近い

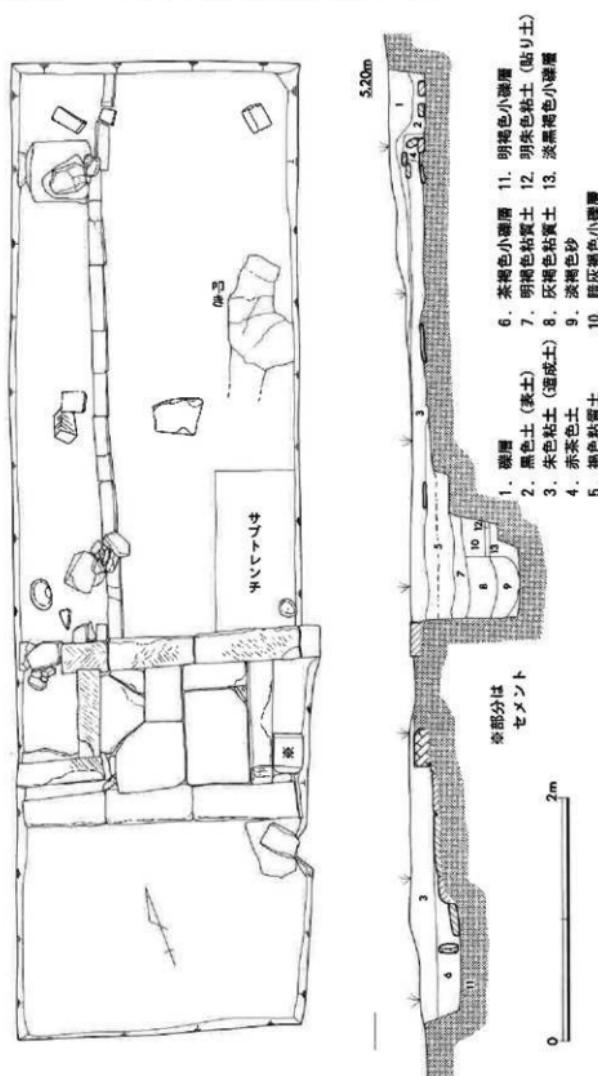


第8図 鞠ヶ浦地区トレンチ配置図 (S=1:1000)

隣接する3つの空き地に設定した。第1トレーニチは島根県運摩郡仁摩町大字馬路町207番地に谷方向と直交する形で、また第2トレーニチはその浜側の同210番地に設定した。第3トレーニチはかつて番屋敷があったと伝えられている同209番地に設定した(第8図)。

第1トレーニチ

トレーニチを設定した屋敷地は、平面方形の地割りを持ち、集落内では標準的な面積があって、しかも16世紀前半、辆ヶ浦が銀鉱石の積出港として機能していた時代に、銀山から運んできた鉱石を尾根から落としたと伝える「馬落」としと呼ばれている場所に近い点で、遺構の検出に非常に期待が持てることから選んだものである。現在の地表面には一番新しい段階の母屋と納屋と思われる基礎石が部分的に観察された。沖泊地区の発掘調査の経験から屋敷地内には明治以降の建物の基礎が良好に遺存している可能性が高いことから、近接する屋敷地の

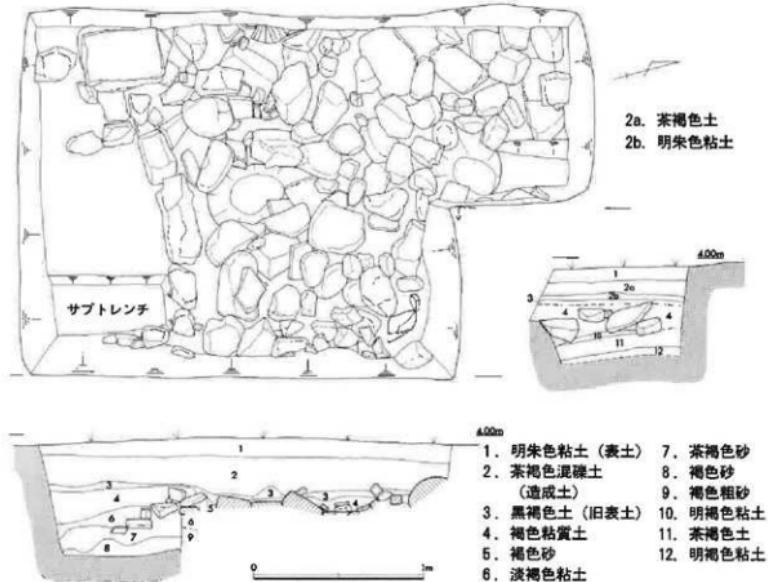


第9図 辆ヶ浦地区第1トレーニチ造構ならびに土層実測図

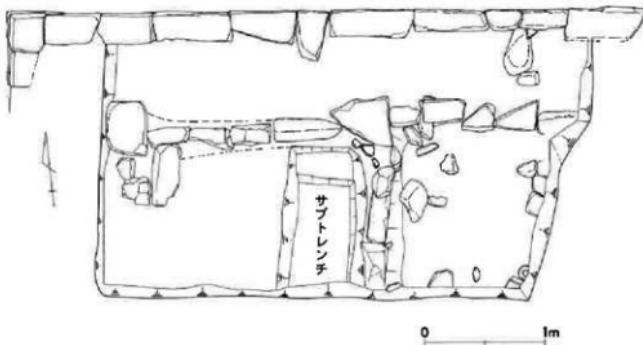
家屋配置を参考にしながら、これらの基礎を外してその間にトレンチを設定し、なるべく古い時期の遺構の検出を目指した。ところが調査した結果、予測に反して表土下10~20cmで、明治以降と思われる家の玄関部分とその内側の踏み込みを検出した（第9図）。

玄関の敷石は現在の舗装された道路の端から約2.8m離れたところにあり、端部は行き方向に布石を連続させて縁に続く。玄関幅は120cmで、石敷きは4枚の切板石を用いる。玄関戸の布基礎は縁と同じ幅の布石を用いるが、玄関両側の布基礎は縁の布石よりもやや幅狭のものを用いている。玄関左側すなわち西側には縁側の布基礎と束石が確認された。玄関の踏み込みは七間になっており、トレンチ北半の一部に叩き土がわずかながら残存していることから、本来は全面叩き土間であったと推定される。玄関内側の左側には、地面を仕切る幅約10cmの切板石が奥に向かって一直線に並んでおり、その西側に柱間180cmの礎石2間分が確認された。中央の礎石は煉瓦ブロック2個を組み合わせただけのものであったが、奥側のものは50cm四方の方形の礎石の上に20cm×30cm×厚さ10cmの直方体をなす自然石をセメントで固定しており、この建物が少なくとも一度は立て直しを行っていることが判明した。叩き土間の奥側東側には煉瓦と粘土で築いた竈の基礎部分が確認された。竈の壁の厚さは20cm程度で、残存高も約20cmであった。竈内表面と内底面が赤く変色しているのが観察された。この遺構面での遺物は極めて限られているが、奥側の礎石の上に置かれた状態で磁器碗（第12図1）が出土した。

玄関内側で礎石や叩き土のない部分に、下層の遺構の有無について確認するため、長さ120cm、幅約60cmのサブトレンチを入れた。約80cmまで掘り下げた状況は、現在の叩き土間も土間中央か



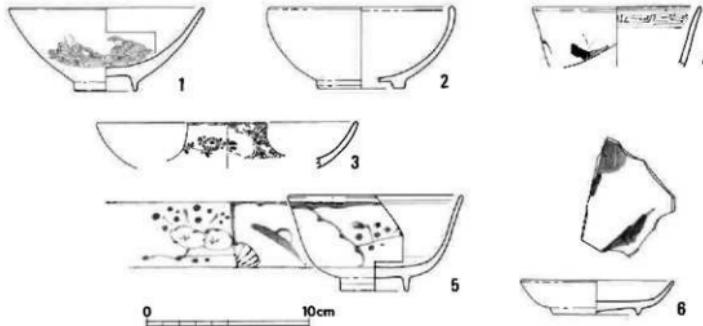
第10図 痴ヶ浦地区第2トレンチ集石遺構ならびに土層実測図



第11図 精ヶ浦地区第3トレンチ遺構実測図

ら玄関側に向かっては上下2枚あることがわかったほか、さらに下に向かって25cmごとに2層にわたって粘土を貼った面が存在することが判明した。この精ヶ浦集落の中では、建物の規模や配置はその地割りに大きく影響されていると判断されることから、これら2枚の粘土も最上面の叩きと同様、当時の建物上間に相当すると推定される。なお、サブトレンチの中で円形の土坑が確認された。現在の土間面よりも一段階古い貼り粘土に覆われているので、それよりも古い遺構であるが時期や性格は不明である。

第2トレンチ トレンチを設定した敷地面は第1トレンチのそれから1m程度低くなっている。現在部分的に畑として利用されており、わずかに残ったスペースに2m×2.5mのトレンチを設定した。地表下30cmで旧表土と思われる黒褐色土に達するが、その直下からトレンチのほぼ全面にわたって人頭人前後の大きさの円礫の集積が認められた。トレンチ西辺と北側を一部拡張して、集石の展開状況を確認しようとしたが、集石の端部は確認できなかった(第10図)。円礫は周辺海岸の岩場に存在しているごく普通の円礫と周辺の尾根を構成する凝灰岩質の礫で、トレンチ南東隅に



第12図 精ヶ浦地区出土遺物実測図(1)

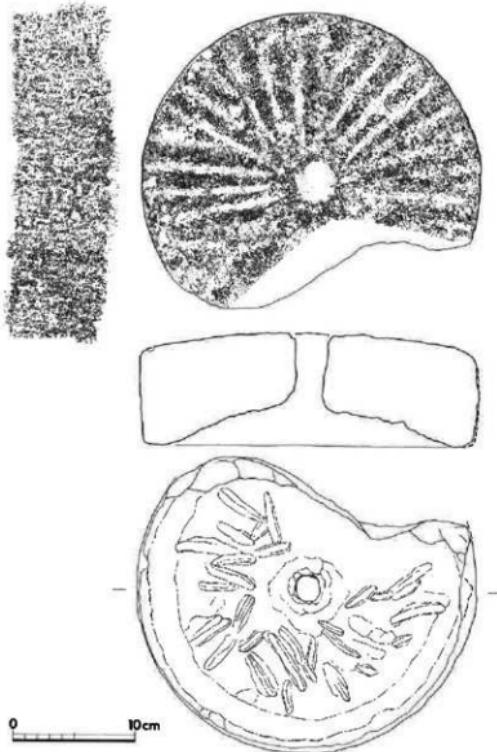
建物の礎石と思われる30cm×45cmのほぼ同じ大きさの平たい石が3段に重ねられている。集石はこの礎石状の平石から東に伸びる幅20cmの細長い石で区画した北側に無造作に重ねられている。集石造構の中には南北2ヵ所の柱穴状に円錐が全くない部分があり、上面の大きさは南側で30cm×50cm、北側で30cm四方を測る。内部には表土と同質の黒褐色土が堆積し、白磁染付片が若干含まれていた。この集石造構は基盤となる褐色粗砂の上に粘質土を盛ってその上に積まれており、トレンチ南端の集石外側部分には海成と思われる均質な褐色砂が堆積する。集石内には染付磁器や石臼などが混入する。

この集石造構の全体像

や性格を知るためにには、さらにトレンチを拡幅する必要があったが、それを行うだけの面積がなかったため、調査はこの状態で終了させることにした。

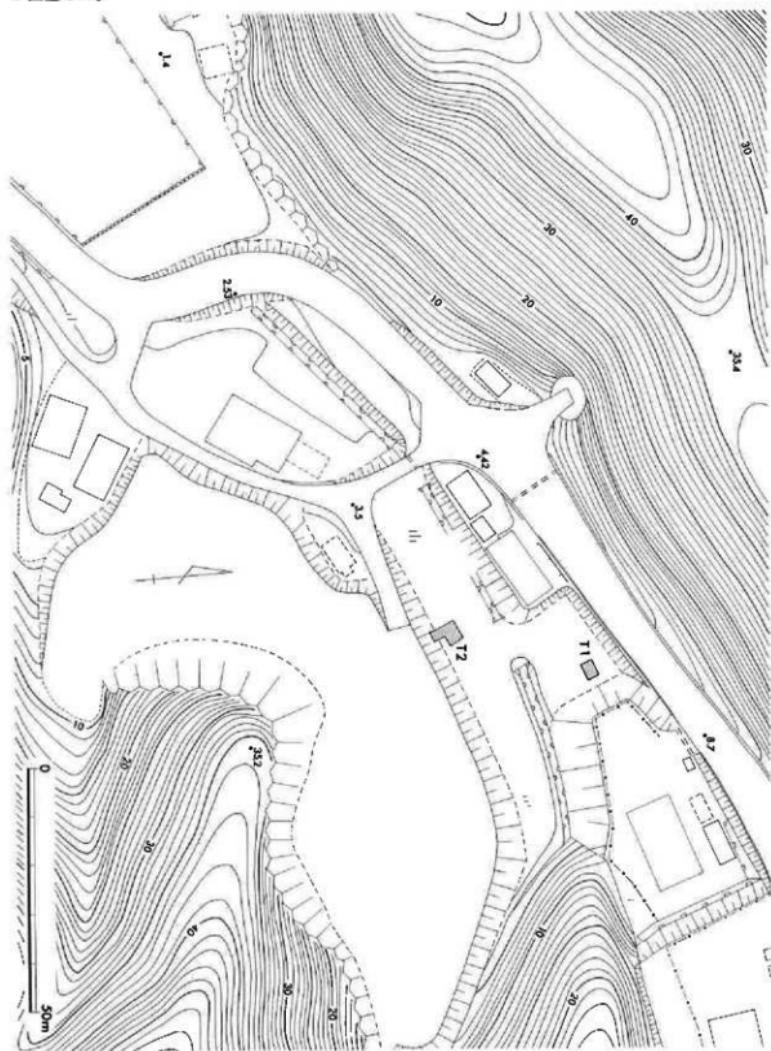
第3トレンチ 原敷地内の南側に倉庫が建っているため、道路側にトレンチを設定した。この空き地は道に沿って石垣が組まれており、その内側に1.5mの長さで石が立ててあることから、かつては石囲いして畠を作っていたと推定される。トレンチはその石列を含める形で、石垣の際から2m×3.5mの大きさに設定した。厚さ15cmから25cmの礎混じりの表土を除去したところ、石垣の道に面した面から約70cm離れて平面方形あるいは三角形に近い礎石とその間の地覆石を検出した(第11図)。地覆石は下面を基底幅25cm程度の粘土帶の上に固定されていた。トレンチ西端の方形の礎石が建物の北西隅の礎石にあたり、礎石間の間隔は心々で約2mである。このことからこの建物の玄関は東側にあり、間口は三間半ないし四間と推定された。なお、発掘前に見えていた煙用の石囲いはこの並んでいた地覆石を起こしたものと判明した。

礎石と地覆石列の内側で下層を確認しようとさらに掘り下げたところ、そこで周辺の地山岩盤と



第13図 鞆ヶ浦地区出土遺物実測図(2)

思われる拳大から人頭大までの礫の堆積が観察された。これをすべて除去すると、トレンチ中央の三角形の礫石から梁行方向に続く地覆石が検出された。除去した礫屑の下面がこの建物の基盤面と推定され、梁行方向の地覆石の東側ではきれいな貼り床が観察され、この面から現代ものの磁器碗が出土した。



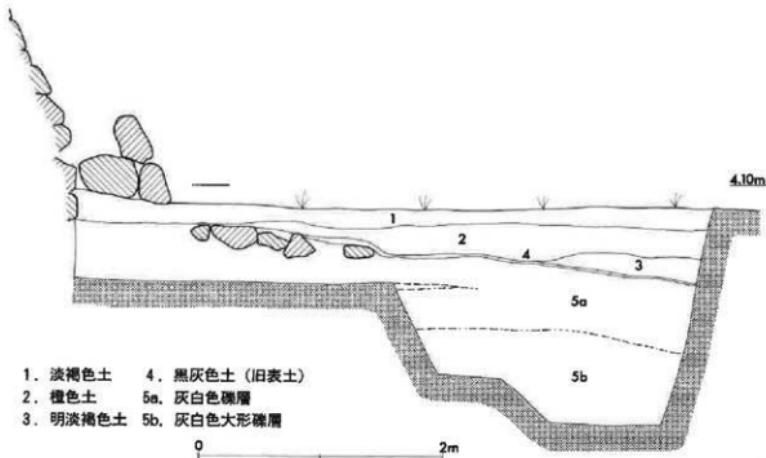
第14図 日村地区 トレンチ配置図

出土遺物 発掘調査の結果、各トレンチでいずれも明治以降と思われる建物跡あるいは集石遺構を検出し、遺構保護のためその下層を掘らなかったことから、出土遺物もほとんど明治時代以降のものである。第12図1は第1トレンチ出土の碗である。外面には印判による法師と公家が向かい合って座している図柄が三対巡る。藍色を基調に袴や袈裟に緑色を配している。大正時代から昭和にかけてのものであろう。2~6は第2トレンチ出土品で、2・6は集石内ビットの出土である。2は緑色がかった灰釉の石見焼碗、3は印刷手法による草花文が見られ、どちらも明治時代頃のものである。4・5は19世紀前半代から幕末ころの染め付け碗、6は18世紀代まで遡ると思われる皿である。第13図は石臼の下臼である。器高9.2cm、直径28cmで、約1/4を欠損する。上面の溝は粗い放射状で、かなり摩耗が進んでいる。底面はくり込んで上げ底となる。時期は不明。

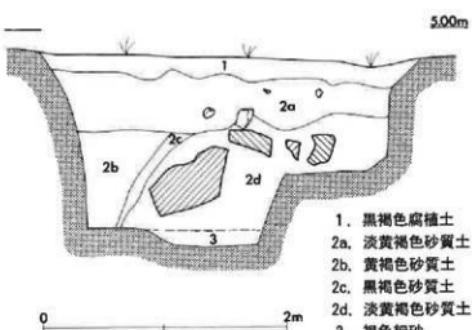
以上のように、鞆ヶ浦地区のトレンチ調査では、沖泊と同様に現在空き地となっていても、明治時代以降と考えられる建物基礎が良好に残存していることが判明した。しかも、第1トレンチで確認したように、現在の遺構面の下にも、造成して貼り床をした古い時代の遺構面が数層にわたって残っており、限られた敷地のなかで地面をかさ上げしながら建物が存続していく様子が推測できた。しかし、この港湾が銀鉱石の積み出しで栄えた時期の資料については残念ながら得ることができなかった。

(3) 日村地区

温泉津町日村地区は沖泊のすぐ南に位置する小湾である。現在は湾口に向かって3面全部が岸壁になっており、倉庫や会社事務所などの建物が数棟建っているのみである。温泉津町多田家文書の慶長10年「石州仁方郡温泉津村御縄帳」には屋敷数16筆が記載されており、屋敷の大きさは大きいもので1畝26歩(56坪)、小さいものではわずか4歩(4坪)で、1畝以上が7筆あるものの、10



第15図 日村地区第2トレンチ土層実測図



第16図 日村地区第1トレンチ土層実測図

跡が存在する可能性のある場所である。トレンチは谷の中央を走る水路を挟んで、旧地形が残存していると推定される2カ所を選んで設定した（第14図）。

第2トレンチ 畑のような平坦地に3m×4mのトレンチを設定した。表上とその下の白色粘土が混在した突き固めたような粘土を除去すると、地表下40cm程度で黒灰色の旧表土に達した。南側採上置き場の石垣に向けてトレンチを拡張したところ、右垣基盤面とこの旧表土が連続していることが判明し、旧表土も戦後の新しい時期のものであることがわかった。さらに下層には拳大から人頭大の安山岩質地山礫があり、旧表土から1.5m程度掘り下げた地点でも依然と同じ礫層が続くことが判明した（第15図）。この礫層は周辺の山から搬入した造成土であると推定され、さらに発掘を続けると壁面の崩落も予想されたため、地表下2mの地点で掘り下げを中止した。

第1トレンチ トレンチを設定した場所には谷の南東方向にある採石地と結ぶ索道の端点があり、この索道基礎コンクリートをはずして2.7m×3.4mのトレンチを設定した。地表下1.5mまで堆積岩質の固い礫を含んだ風化礫層に終始し、その下は粒子の粗い砂層となった（第16図）。地表下1m程度で湧水が始まり、最下面では川のように水が流れトレンチ内に溜まることがなかった。大きな礫が多いほか、流水が著しく、それ以上の掘削は不可能であった。

以上の調査結果から、当該地点はかなり以前に人造成が行われたと考えられ、その時期としては谷南東部の採石場が操業を始めた頃が考えられる。その後、現在の町道建設と谷奥側にある警察官舎の建設に伴って現在の水路が整備されたと推定される。かつての小川がどのあたりを流れていたか特定はできていないが、谷の形状を考慮すると第1トレンチを設定した場所あたりに川があつても不思議はないと思われる。しかし、第1トレンチ最下面と現在の水路底面の一番近いところを比較するとトレンチ下面のはうが1.5m程度高いことから、第1トレンチ付近も相当盛り上されている可能性が強く、トレンチ下面もまだ造成土内で終わっている可能性が強い。

最終的に日村集落の存在を確認するためには、今後重機による確認調査が必要であろう。

（注）

仲野義文「温泉津湾の諸港と機能一温泉津・沖泊を中心にして」『石見銀山街道 須ヶ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会 2005年1月

歩に満たないものも6筆ある（注）が、尾敷地を合計すると410歩（410坪=1353m²）の集落があったことになっている。

かつて近くの山が採石場になったり、町道が建設されたりして、当初の地形からかなり改変を受けており、現在は集落の場所を推定できるような状況はない。しかし、今回の下水道処理場予定地は、字名が千軒であることから集落

第4章 まとめ

以上の調査成果から、沖泊・鞆ヶ浦両集落の地割りの形成過程や遺構の遺存状況について重要な情報を得ることができた。すなわち、まず沖泊地区については、第1・3トレンチ地点は19世紀前半代から江戸末の時期の造成土が発見され、これにより地面がかさ上げされるとともに、南側に平坦地が大きく拡幅されたことが推定された。そもそも沖泊の屋敷地は、慶長10（1605）年の「石州仁方郡温泉津村御郷帳」（多田家文書）に屋敷20筆とあり、元禄5（1692）年の「温泉津町屋敷観」（同）では26筆であったが、明治9年の切図では55筆に増えており、江戸時代中期以降2倍以上になったことがわかっている。慶長期から元禄期までの間の増加は、その間の屋敷地の総面積は全く変わらず、わずかに分筆によって増加したものであることが史料の分析⁽¹⁾で判明している。これに対して元禄期から明治期の増加については、その原因を特定することができていない。元禄の屋敷地の面積をみると、一畝を越えているのはわずか2筆、残りはいずれも25歩（25坪）以下で、10歩に満たない屋敷地も7筆あるので、元来の地番がさらに分筆されたということは考えにくい。むしろ今回の調査結果により、基本的にこの大造成による新しい屋敷地の造作、あるいは新たな屋敷列の增设によるものが大きかったと推定される。

狹長な谷部に成立する港湾集落の初現的な形態は、鞆ヶ浦集落に見られるように、谷の中央を流れる小川とそれに添った道を中心としてその両側に屋敷地が連なっていく形であると考えられる。明治初期から地割りの形状が変わっていない現在の沖泊の地割りをみると、第3図のように街路が2本、屋敷地の地割り列が3列という特徴がある。この集落構造の相違の原因が、今回の調査で判明した造成による屋敷地の拡幅にあるのは明白である。現在の地割りの成立過程を復元すると次のようなことが考えられる。すなわち、沖泊集落の初現的な形態も谷中央を走る小川と道の両側に屋敷地が並ぶというものであった。当時の集落の位置は特定できないが、19世紀前半代から江戸末の時期に南側の山裾を削って平坦地を広げるとともに、その掘削土でかさ上げをして屋敷地を新たに造作した。その際、どこまで造成したかという問題があるが、少なくとも第1・第3トレンチのある道路南側に限定されたとは考えにくい。道路を挟んで中央の屋敷列の地表面、さらにはこの部分の集落を流れる小川の石垣や現在の地表面が川の両側で異なるところがないことから、このあたりすべてが新たに造成されたか、あるいはもともとあった屋敷地も含めて造成し直したことが考えられる。後者の場合、あらたにできあがった南山筋とともに小川と道までの間に造成前と同じ大きさの間口の屋敷地を作ると、そこにウナギの寝床状態の細長い屋敷地ができることがある。それでは利用上不都合が生じるし、あるいは造成前と異なる面積の敷地を作ること自体が認められない状況があると、造成前とおなじ面積の屋敷地を南尾根側にとり、その北側に新しい道を造ることで集落内の交通に便宜を図ると共に、新道と小川・旧道との間に同じ間口の新しい屋敷地を作るに至ったということが考えられる。したがって、この場合、新道を挟んで同じ間口で並ぶ向かい合わせの屋敷地は、基本的に同じ所有者ということになるが、実際に現在の所有者を調査してみるとまさにそのとおりになっている。さらに、南尾根標の削除が及んだと推定される範囲と新道路の分岐する地点もほぼ一致している点も、以上の考え方の証左となるものである。集落内をもう少し詳細に発掘調査しなければ、以上のようなことを確定するには至らないが、今回の発掘調査から得ら

れた知見から、築造構造の変遷として、このようなことが推定されよう。

さて、問題となるのはなぜ19世紀前半代から江戸末に大造成を行って屋敷地を増やしたかという点であるが、これについては温泉津湊全体の動きと大きく関わっている問題であり、簡単には結論づけられない。しかし、少なくとも18世紀代に開発された日本海西回り航路による北前船の寄港場が、温泉津湊の発展に大きく寄与していたことはすでに指摘⁽¹⁾されていることであり、造成された中央の屋敷列に今も土蔵が残っていることなどからも、そうした湊の沿況が深く関係していたであろうことは想像に難くない。

次に、鞆ヶ浦地区では、沖泊のような大造成は確認されなかったが、第1トレントで同じ地割りの中で盛り土を行い、貼り粘土をして基盤面を整えている様子が数層にわたって観察された。このことは、狹隘な谷間の限られた空間の中で建て替えを繰り返すにあたって、前の建物の基礎、礎石を利用する場合もあったであろうが、新たな基礎にする場合は一つの地割りの中で盛り土をしてかさ上げし、粘土等を貼て基盤面としたことを窺わせる。しかも、鞆ヶ浦集落では、基本的に母屋と道路との間に前庭を設け、母屋に対して直角に、すなわち上字型に別棟の納屋を建てる建物配置に大きな特徴があり、この形態は江戸時代から踏襲されている可能性が強いので、サブトレントで確認した貼り粘土は上面で確認した土間の叩き土と同じように上間の貼り床であった可能性が強い。今回の調査では調査範囲があまりにも狭かったため、この点を断定するまでには至らなかったが、今後の調査で建物の変遷が解明されることに期待したい。

なお、鞆ヶ浦地区第2トレントでは性格不明の築石遺構が確認された。全体の形状は追求しきれなかったが、南側の一辺が直線となっており、その一端に礎石もあることから、平面方形の築石遺構の可能性がある。築石遺構内には柱穴らしいピットがあり、これが2個で終わりなのか、4個になるかは不明である。この地域では掘炬燵の下を石敷きにする例があると聞くのでその可能性も否定できないが、規模が大きすぎる点が難点である。これも今後類例資料等の収集検討が必要である。

(注)

- (1) 仲野義文「温泉津湊の諸港と機能—温泉津・沖泊を中心に—」『石見銀山街道 鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会 2005年1月
- (2) 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会『石見銀山遺跡総合調査報告書 平成5年度～平成10年度 第6冊【民俗調査・港湾調査・街道調査編】』 1999年



沖泊地区
港湾



同
集落近景



同
第1トレンチ設定箇所

図版 2



沖治地区
第1トレーニチ
西半



同
礎石検出状況



同
トレーニチ東端



沖泊地区
第1トレンチ南壁



同
第3トレンチ西壁



同
7層上面の溝状落ち込み

図版 4



沖泊地区
第2 トレンチ設定箇所



同全景



同西壁



那ヶ浦地区
第1トレンチ



同景
全



同
玄関石敷

図版 6



柄ヶ浦地区
第1トレンチ玄関磯石



同
土間北側磯石



同
かまど跡



病ヶ浦地区
第1トレンチサブトレンチ土層



同
第2トレンチ設定箇所



同
集石遺構

図版 8



柄ヶ浦地区
第2トレンチ東壁（南半）



同
東壁（北半）



同
集石造構南端部磁石



鶴ヶ浦地区
第3トレーニング所



同
全景(東から)



同
近景

図版10



日村地区
第2トレンチ設定箇所遠景

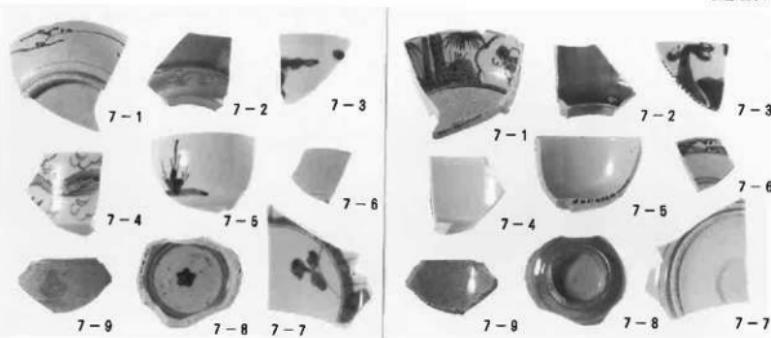


同
第2トレンチ西壁

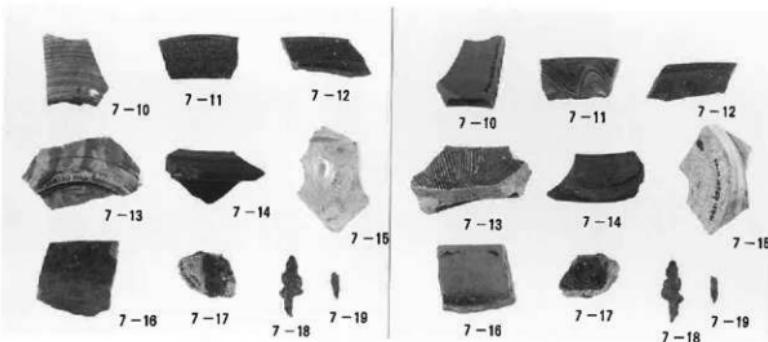


同
第1トレンチ南壁

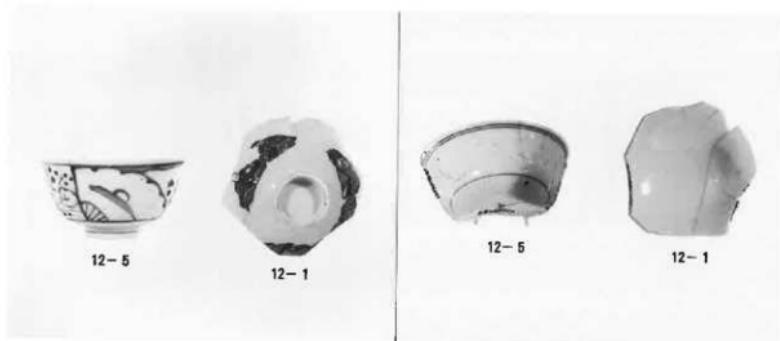
図版11



沖泊地区第3トレンチ出土遺物（1）

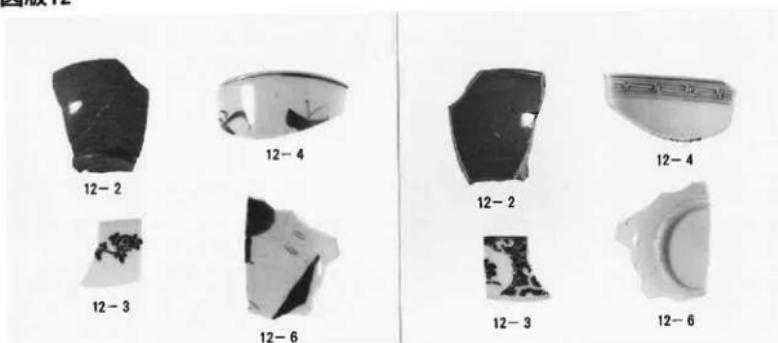


沖泊地区第3トレンチ出土遺物（2）

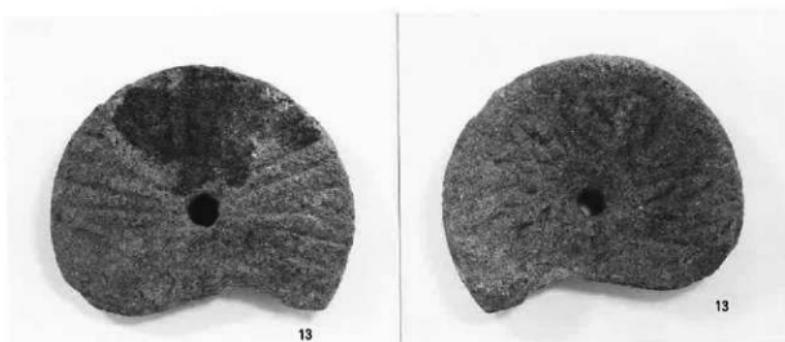


柄ヶ浦地区出土遺物（1）

図版12



楠ヶ浦地区出土遺物（2）



楠ヶ浦地区出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	いわみざんざんいせきこうわんしゅうらくはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	石見銀山遺跡港湾集落発掘調査報告書						
副書名							
シリーズ名							
巻次							
編著者名	足立克己						
編集機関	島根県教育委員会						
所在地	島根県松江市殿町1番地						
発行年月日	平成17年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査年月日
		市町村	遺跡				
石見銀山遺跡 沖泊	島根県隱岐郡温泉津町 温泉津ロ257番地	324213	C77	35° 06' 01"	132° 20' 35"	27.5m ²	2004.4.14～ 2004.5.18
石見銀山遺跡 鞆ヶ浦	島根県隱岐郡仁摩町 馬路207番地	324221	B86	35° 07' 33"	132° 22' 42"	33.2m ²	2004.5.7～ 2004.5.27
調査原因	国庫補助事業による遺跡の内容確認調査						
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
石見銀山遺跡 沖泊 (集落)	港湾跡	中世 江戸時代 近代	礎石建物跡	陶磁器、鉄器 古錢、瓦			
石見銀山遺跡 鞆ヶ浦 (集落)	港湾跡	中世 江戸時代 近代	礎石建物跡 集石遺構	陶磁器			

石見銀山遺跡港湾集落

発掘調査報告書

平成17年3月31日発行

発行・編集 島根県教育委員会

島根県松江市殿町1番地

印刷・製本 株式会社報光社

出雲市平田町993番地